

音 楽 科

徳 田 典 子
西 村 真理子
笹 谷 真理子

1 音楽科における「考える子」

子どもは魅力のある音楽と出会うと「楽しい!」「かっこいいな!」「おもしろいな!」と、その曲について興味や関心をもつ。

そして、さらに興味関心が深まったとき「もう一度聞きたい」「この曲のことをもっと知りたい」「演奏してみたい」「どうしたらいい演奏になるのか」といった音楽に対する「問い」や「こだわり」をもつ。その「問い」や「こだわり」を子ども自身が追求していくためには、音楽から感じ取ったことを思考・判断し、そのプロセスや結果を自分の言葉や音・音楽で表すことが大切である。自分の思いや意図をもって音楽を表現したり、曲から感じ取ったことと、音楽を形づくっている要素を結び付けて聴いたりすることで、曲のよさがより明確になる。また、思考・判断したことを自分の言葉や音・音楽で表し、友達と考えを伝え合ったり互いに聞き合ったりすることで、さらに自分の思いに合った表現につながっていく。

本校の音楽科における「考える」とは、音楽に自分の思いをもって、自らはたらきかけ、音楽から感じ取ったことを思考・判断したり、自分の思いに合った表現のために試行錯誤したりして音楽のよさを追求していくことである。このような音楽活動をくり返すことで「考える子」が育まれる。子どもが主体的に言葉や音・音楽を使って考えることで、子どもの表現はさらに高まり、音楽的な感受性を高めることにつながるであろう。

このことから音楽科における「考える子」を次のようにとらえる。

音楽から感じ取ったことを思考・判断し 言葉や音・音楽をつかって表現を試行錯誤しながら音楽のよさを追求していく子

2 学ぶ楽しさを味わう音楽科の授業

音楽科における「学ぶ楽しさを味わう授業」とは、子どもが魅力のある音楽と出会い、友達とかわりながらそのよさを共感したり表現する喜びを分かち合ったりする中で、「もっと～したい」という「こだわり」をもち、自分の思いをもって試行錯誤しながら表現の高まりを実感できる授業である。

学ぶ楽しさを味わうためには、まず子どもが感動やあこがれをもつような魅力のある音楽に出会うことが大切である。その音楽との出会いは「もっと聴きたい」「もっとよく表現したい」「工夫したい」という音楽活動への意欲につながっていく。

また、子どもは、友達とのかかわりの中で音楽のよさを共感したとき、楽しさを味わう。友達とのイメージの違いや互いの表現のよさを伝え合うことで、友達の表現の面白さや、自分の表現が高まっていく喜びを感じる。そのことが、さらにいい表現にしたいという意欲にもつながっていく。

できるようになったことや、表現の高まりを感じられるようになったことを子どもが実感していくことで、表現することへの満足感や達成感が得られる。

3 「学ぶ楽しさを味わう授業」への手だて

(1) 感動やあこがれを感じさせる音楽との出会い

感動やあこがれを感じさせる音楽との出会いから「すてきな曲だな、もっと聴いてみたい」「どうしたらこんなふうに演奏できるのかな」「こんなふうに演奏を工夫したい」などの「問い」や「こだわり」が生まれる。その「問い」や「こだわり」を追求していくためには、曲の表現のよさが伝わるような演奏や映像と出合わせ、子どもにゴールの演奏のイメージをもたせることが大切である。

教師は、子どもが音楽のよさを追求し続けられるように、子どもの実態や発達段階、既習内容を見極めながら、子どもの琴線をゆさぶる題材と出合わせていく。また、様々な演奏や映像の中から子どものゴールのイメージに合い、「表現したい」という意欲が高まるものを吟味することが大切である。

高学年やゲストティーチャーによる生演奏なども表現へのあこがれにつながり、自分たちもこんな演奏をしてみたいという音楽との出会いとなる。

(2) 互いの思いを伝え合い 表現の交流をさせる

子どもがイメージする演奏に近づくために、その音楽のもつよさを音楽的な要素に着目して思考・判断し、表現を試行錯誤することによって、深く感じ取ったり、次の表現に生かしたりしていくことができる。意欲をもって表現活動に取り組み、よりよい表現を追求していくためには音楽表現に対する互いの思いや意図を、言葉や音で表現し交流させることが大切である。

表現においては、「イメージに合った音色にするにはどうしたらいいのかな?」「バランスのとれた演奏にした方がいいよ」「強弱を工夫することで感じが変わるよ」などと、実際に音を出して表現の工夫をしながら、互いの表現を聴き合い、自分の表現の思いや意図を言葉で伝え合う。その活動をくり返すことで、互いの表現を見直し、さらに自分のイメージに合った表現に生かしていくことができる。

鑑賞においては、自分が感じ取った曲の特徴を音楽的な要素と結び付けて思考・判断し言葉で伝え合い、伝え合ったことを実際に聴いて確かめることをくり返していく。このことが、今まで気づけなかった曲の特徴に気付くことになり、より音楽のよさを味わって聴くことの手だてとなる。

授業のねらいに応じて個別学習、ペア学習、グループ学習を取り入れ、子ども同士が互いに思いを伝え合い学び合う形態を工夫する。

(3) 成長が自覚できる場を設け 変容を認識させる

自分の思いや意図をもって表現してきた子どもは、自分の成長を自覚することで次の目標に向かって、新しい表現をつくり上げていく。

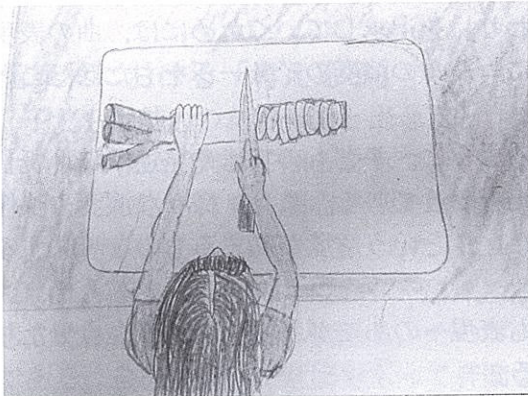
試行錯誤してつくってきた自分の表現を、友達と互いに聴き合う発表の場を設定する。自分の表現の工夫したところを認めてもらったり、友達の表現と自分の表現を比較し、自分の表現のよさに気付いたりすることで、自分の成長を自覚し変容を認識することができる。

音楽は視覚でとらえにくく瞬時に消えていくため、自分の成長が作品として残らない。自分の成長を自覚するための手がかりとして、録音を聴き直す活動や録画したものを視聴する活動を取り入れることもできる。これによって子どもは、はっきりとした変容を認識し、自分の成長を自覚できる。また、子どもの意識が変容していくことを自覚させるためには、自分自身をふり返った内容を目に見える形で残していくことが有効な手だてとなる。

聴き取ったことや感じ取ったこと、創作したことを表すために絵譜や図形楽譜、ワークシートなども活用していく。

(1) 感動やあこがれを感じさせる音楽との出会い

4年生「音楽が表している様子を思いうかべながら聴こう ～つるぎのまい～」の実践から
本題材では、旋律の特徴から曲想を感じ取り、想像豊かに聴く活動をするために、音楽と



資料1 CDの聴き取り後描いたイメージ画



資料2 DVDを視聴後描いたイメージ画

の出合わせ方を工夫した。

第一次の初めての聴き取りでは、CDを使用した。CDを使用することで、じっくりと旋律の特徴を聴いて、より想像豊かに音楽が表している様子を思いうかべながら聴くと予想していた。

そこで、演奏を聴き取った後、子どもが思いうかべ、感じ取ったことをイメージ画として表現させた(資料1)。

包丁でみじん切りをしている表現から、この楽曲の強烈なリズムにのってくり返される特徴のある旋律が印象に残ったことが見取れた。

第二次では、この楽曲の主旋律を鍵盤ハーモニカで演奏した。子どもがほぼ演奏表現が出来る段階で、オーケストラ演奏によるDVDを視聴し、イメージ画を描かせた(資料2)。

主人公を中心に描き、剣と花の対比から、前半・後半の曲想と中間の曲想の違いを感じ取っていたことが見取れた。

初めてCDの聴き取りをした段階から主旋律を演奏することができるようになった段階では、聴き方や感じ方がちがう。

イメージ画の見取りでは、はじめは、「つるぎのまい」で一番感じ取りやすいリズムや旋律に着目した。さらに演奏ができて上がるようになってからは、この楽曲全体にわたる曲想をとらえ、リズムや旋律の変化が楽曲の構造にかかわっていることが、絵の構図や色彩の違いによって表現された。

このように、聴き取った楽曲の特徴や演奏のよさをイメージ画で表現させることは、子どもがその楽曲から、何を感じ取っているのかを見取る有効な手だてとなった。

また、感動やあこがれを感じさせる音楽との出会いは、学習のどの段階で、どのような演奏やメディアと出合わせるかを考え、構成することが必要だと感じた。

本題材では、第一次では、CDの聴き取り、第二次では、オーケストラ演奏によるDVD視聴、第三次では、この楽曲のタイトルの舞踏組曲「ガイーン」を意識したバレエの映像などを準備し、出合わせた。この題材で様々なタイプの音楽と出合わせたように、常に楽曲が新鮮であり、感動やあこがれをもてるような出会いを考えた手だては、表現の意欲へとつながった。

5年生「リズムアンサンブルをつくろう～インターロックキングの音楽づくり～」の実践から

本題材では、インターロックキングの音楽の出会いとして、スティーブ・ライヒの「クラッピングミュージック」とインドネシアの「ケチャ」の2曲を取り上げた。

まず、この楽曲の鑑賞活動に入る前に、インターロックキングの特徴である「入れ子のリズム」を体感させるため、一定のリズムパターンの休符の拍に手拍子を入れる穴うめゲームをした(資料3)。インターロックキングの音楽は、全体として複雑で不思議な音楽に聴こえてく

る。そのため、簡単な絵譜を用いて可視化し、実際に体験することで、鑑賞した時に、インターロッキングの音楽の特徴をとらえやすくしたいと考えた。

初めにスティーブ・ライヒの「クラッピングミュージック」の視聴から始めた。リズムアンサンブルの音素材となるクラッピングの演奏は、本題材のゴールをイメージした演奏としてとらえやすいと考えた。クラッピングは、手軽に奏でることができる音素材である。インターロッキングという音楽の仕組みは、わかりやすいにもかかわらず、組み合わされることで、複雑で不思議な魅力になることなどを、DVD視聴や体験から感じ取っていた。



資料3 入れ子のリズムを体感する姿

次に、インドネシアの「ケチャ」の視聴をするにあたり、子どもには言葉による「ケチャ」の体験をさせた。「チャ・チャ・チャ・ク・ク・チャ・チャ・ク | ○○○●●○○● | 」と言葉のリズムになれてきた子どもは、「言葉にクラッピングも加えると、きっと上手く揃うよ」と言い、かみ合わせのリズムの「ク・ク・ク・チャ・チャ・ク・ク・チャ | ●●●○○●●○」と合わせる体験を楽しんだ。この後、子どもは「ケチャ」のDVD視聴をした。複雑に思える「ケチャ」の音楽が、体験をしたことで、インターロッキングの音楽の仕組みによってできていることに気付き、興味をもって鑑賞できた(資料4)。

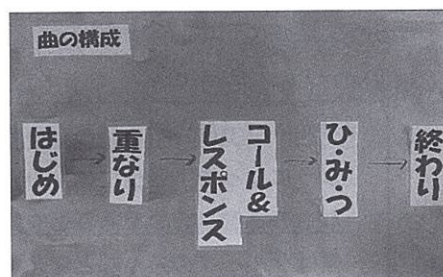
- ・「クラッピングミュージック」では、5人だけで、しかも、手拍子だけなのに、曲がつくれて、こんなことが出来るのかと圧倒されました。私もやってみたいです。音楽は、道具(ピアノやドラムなど)を使わなくても出来て、不思議だなと思います。それから、みんなで体験したゲームは、そんなに難しくはないと思ったのに、やってみたら、とても複雑で不思議な感じがしました。(A児)
- ・インドネシアの「ケチャ」は、声を上手にかみ合わせていて、すごいと思いました。ずーっとさげんでいる人や、みんながガチャガチャ言っていないときも、メトロノームみたいに、「アッアッ」と声を出していたので、大変だなと思いました。全体としては、一つの声に聴こえてきたけど、本当は音がかみ合わさっていると気づきました。そして、みんなの息がとても合っていました。それから、「チャ」「ク」の言葉で、「ケチャ」の体験を試みたら、わずか2小節なのに合わせるのが難しかったので、インドネシアの人は、相当練習したのだと思いました。(B児)

資料4 インターロッキングの音楽を鑑賞した感想

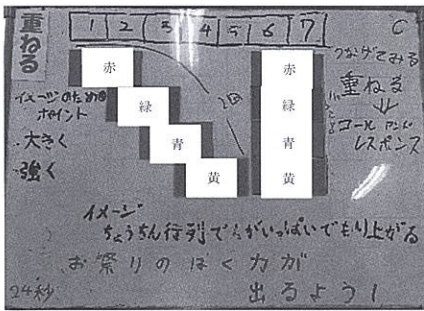
(2) 互いの思いを伝え合い 表現の交流をさせる

5年生「リズムアンサンブルをつくろう～インターロッキングの音楽づくり～」の実践から本題材の第二次では、インターロッキングの音楽の仕組みを生かしたリズムアンサンブルをつくった。インターロッキングの音楽は、単純なリズムをいくつか組み合わせることで、全く違った聴こえ方になる。

そこで、このリズムアンサンブルでは、グループで二つのモチーフを選ぶことで、4種類のリズムパターンからなる構成とした。また、音楽の仕組みや構成などの約束ごとを決めることで、多様な表現を引き出すことをねらった。(資料5)。表現の交流では、演奏の聴き取りを通じて、テーマタイトル(A:夜景 B:トランポリン C:おまつり)のどのようなシーンをイメージ



資料5 曲の構成



資料6 Cグループの構想図

して演奏表現を考えたかを解き明かしていく方法をとった。

Cグループの「重なり」部分は、構想図のように演奏した(資料6)。赤から緑・青・黄と順に、2小節ずつ演奏し、1小節ずつ重なるように考えられていた。最後はちようちん行列で、人がいっぱい盛りに上がるようなイメージで、全色が重なった。

表現の交流後の感想では、Cグループのイメージが演奏を通じて伝わっていた(資料7)。

C児:最初は、人が少ないお祭りで、だんだんとにぎわいが出てきた。

D児:舞台上で踊っているみたいで、だんだんと人数がふえていっている。

E児:強弱があって、にぎやかな感じのおまつりに思えた。

F児:GさんやHさんから演奏が始まり、屋台が出ていてたくさんの人が集まっている様子がイメージできるよ。

資料7 Cグループ タイトル「おまつり」イメージの感想

ここで、構想図を他のグループの子どもに見せて、もう一度演奏させた。聴き手となった子どもは、解き明かしたことが、この構想図をみることで明らかになった。子どもは、構想図を見ながら演奏を聴くことで、「重なり」の工夫によって、Cグループが表現したいイメージ(ちようちん行列で、人がいっぱいになり盛り上がる)を理解することができた。また、聴き手となった子どもは、構想図があることで、さらにどのような工夫をすれば、イメージに近づくかということアドバイスを手だてになった。

本題材のインターロッキングのリズムパターンは、4種類を設定するため、1グループのメンバーを4色(赤・青・黄・緑)に分け、互いの役割をはっきりさせたいと考えた。

そこで、学習形態を設定するにあたり、この音楽づくりに適した環境などを考慮して、3グループに編成した。グループ学習では、音楽の技術上の課題を協力して解決することで、音楽の表現効果の基礎となる音の相互関係が把握できる。だが、実際には一人一人の性向や経験や異なった考えの子どもが学習に取り組んでいることもあり、音楽の技術上の課題以外の対立や矛盾が出てくることもあった。子どもはその課題をよく話し合っ解決法を考え、お互いに助言したり、励まし合ったりして学び合った。特に、全体でグループ学習のふりかえりをするすることで、各グループの課題や問題点を学級全体が理解し、対処法をアドバイスし合うことで解決した。

子どもは、このような経験をくり返すことで、技術上のさまざまな問題に対し、知的な分析によって、問題を解決する習慣が付き、対処する仕方を学んだことは、表現に大きな利点があった(資料8)。

- ・グループでは、いろいろなトラブルがあったけれど、それを乗り越えるたびに、いい意見がたくさん出るようになって、最後には、みんなで楽しく音楽をつくることが出来た。協力の難しさなどの道徳的のものと音楽をつくることを同時に学べてよかったです。(I児)
- ・僕はグループのみんなと考えを出し合うことで、協力して音楽づくりができたことが一番印象に残りました。この授業はとっても楽しい勉強でした。(J児)

資料8 グループ学習についてのふりかえり

(3) 成長が自覚できる場を設け 変容を認識させる

5年生「リズムアンサンブルをつくろう～インターロッキングの音楽づくり～」の実践から本題材では、発表の場を通じて、表現の聴き比べをした。J児の「これからどうすればよ

いかを知ることができた。」とあるように、友達からのアドバイスは、今までの表現をさらに創意工夫することで、新しい表現に向かっていくための手だてとなった。また、自分のグループがつくった表現の変容を認識したいと感じたときは、録画を再生してふり返るという手段をとった。

ふり返る手だてとしては、タブレットの活用をした。「重なり」の表現を考えていたCグループは、タブレットに録画してあった「コール&レスポンス」の表現を視聴したことで、曲全体の構成を意識するようになった。ちょうちん行列をイメージした「重なり」からおみこしをイメージした「コール&レスポンス」への構成は、それぞれの様子をはっきり表れるように工夫することができた。ICTの活用は、グループの表現を客観的に見つめることができる手だてとなった。構想図についても、授業の最後にデジタルカメラで撮影をして、履歴を残す方法をとったことで、前時までに考えた表現の履歴をふり返ることができた。

また、まとめの表現を終えてからは、事後のふりかえりによって、本題材をふり返った。事後のふりかえりによると、子どもは、友達と互いに聴き合う場を設定することや表現についての意見交換することから、成長を認識できるようになった。子ども同士が意見を出し合い、話し合いをもったことは、子どもにとって、豊かな芸術的な表現の機会を与えた(資料10)。

3. 今回の学習では、友達のグループの作品を鑑賞する場をつくりましたが、このくりかえしの学習で自分たちの考えや表現が変容して成長していくことが自覚できたことは何ですか？

・他のグループの表現をみて、リズムの合わせ方を変えればいいとわかりました。それから、そのタイトルにふさわしい音楽にするためには、もっと具体的にどんな表現やシーンにすればいいのかを考えればいいのだと気付かされました。友達からのアドバイスは、これからどうすればよいかを知ることができて成長できたと思いました。(J児)

・ABCのそれぞれの演奏を見合って、いろいろ良いところやアドバイスを言い合って、自分のたちのグループの表現をより音楽にしていけたので、とても良かったと思います。他のグループの作品には、Bグループにない工夫がされていて、特に、Cグループは特徴的な声や音が多くてびっくりしました。その表現を利用して「ひみつ」の部分をつまみました。とてもいい作品になったと思います。(K児)

資料10 事後のふりかえり

今後に向けて

「学ぶ楽しさを味わう授業」への手だて(1)では、題材の導入で出合う音楽から、題材のゴールとしてのとらえをもたせることを意識しなくてはならない。実践では、子どもがその音楽と出合うことによって、題材の本質に気付いていく力となった。そのことを踏まえて、どのような楽曲と出合わせるか、また、学習のどの段階で出せるかを吟味する必要がある。

(2)では、グループ学習を土台にした学習内容をさらに考えていきたい。題材の事後アンケートによると、音楽の技術上のいろいろな問題を協力して解決するというを超えた精神的な成長をもたらす効果がみられた。そのことをもとに、思いがお互いに刺激され、自然と意欲が出てきて創意のある表現ができるようになる題材の工夫をしたい。

(3)では、今回の実践で使用したタブレットや構想図のように、子どもが使いやすく、その表現にあった履歴の残し方を考えていかなければならない。

また、実践では、子どもの見取りを意識し、5年生に事後アンケートを実施した。「4. この学習は楽しかったですか？」の問いに対し、子どもは「とても楽しかったです」とほぼ全員が記述している。アンケートからみる子どもの考えも大いに取り入れて、さらに学ぶ楽しさを味わう授業を構想したいと考えている。

いかを知ることができた。」とあるように、友達からのアドバイスは、今までの表現をさらに創意工夫することで、新しい表現に向かっていくための手だてとなった。また、自分のグループがつくった表現の変容を認識したいと感じたときは、録画を再生してふり返るという手段をとった。

ふり返る手だてとしては、タブレットの活用をした。「重なり」の表現を考えていたCグループは、タブレットに録画してあった「コール&レスポンス」の表現を視聴したことで、曲全体の構成を意識するようになった。ちょうちん行列をイメージした「重なり」からおみこしをイメージした「コール&レスポンス」への構成は、それぞれの様子がはっきり表れるように工夫することができた。ICTの活用は、グループの表現を客観的に見つめることができる手だてとなった。構想図についても、授業の最後にデジタルカメラで撮影をして、履歴を残す方法をとったことで、前時までに考えた表現の履歴をふり返ることができた。

また、まとめの表現を終えてからは、事後のふりかえりによって、本題材をふり返った。事後のふりかえりによると、子どもは、友達と互いに聴き合う場を設定することや表現についての意見交換することから、成長を認識できるようになった。子ども同士が意見を出し合い、話し合いをもったことは、子どもにとって、豊かな芸術的な表現の機会を与えた(資料10)。

3. 今回の学習では、友達のグループの作品を鑑賞する場をつくりましたが、このくりかえしの学習で自分たちの考えや表現が変容して成長していくことが自覚できたことは何ですか？

・他のグループの表現をみて、リズムの合わせ方を変えれば良いとわかりました。それから、そのタイトルにふさわしい音楽にするためには、もっと具体的にどんな表現やシーンにすれば良いのかを考えれば良いのだと気付かされました。友達からのアドバイスは、これからどうすればよいかを知ることができて成長できたと思いました。(J児)

・ABCのそれぞれの演奏を見合って、いろいろ良いところやアドバイスを言い合って、自分のたちのグループの表現をより音楽にしていけたので、とても良かったと思います。他のグループの作品には、Bグループにない工夫がされていて、特に、Cグループは特徴的な声や音が多くてびっくりしました。その表現を利用して「ひみつ」の部分を工夫しました。とてもいい作品になったと思います。(K児)

資料10 事後のふりかえり

今後に向けて

「学ぶ楽しさを味わう授業」への手だて(1)では、題材の導入で出合う音楽から、題材のゴールとしてのとらえをもたせることを意識しなくてはならない。実践では、子どもがその音楽と出合うことによって、題材の本質に気付いていく力となった。そのことを踏まえて、どのような楽曲と出合わせるか、また、学習のどの段階で出合わせるかを吟味する必要がある。

(2)では、グループ学習を土台にした学習内容をさらに考えていきたい。題材の事後アンケートによると、音楽の技術上のいろいろな問題を協力して解決するということを超えた精神的な成長をもたらす効果がみられた。そのことをもとに、思いがお互いに刺激され、自然と意欲が出てきて創意のある表現ができるようになる題材の工夫をしたい。

(3)では、今回の実践で使用したタブレットや構想図のように、子どもが使いやすく、その表現にあった履歴の残し方を考えていかなければならない。

また、実践では、子どもの見取りを意識し、5年生に事後アンケートを実施した。「4. この学習は楽しかったですか？」の問いに対し、子どもは「とても楽しかったです」とほぼ全員が記述している。アンケートからみる子どもの考えも大いに取り入れて、さらに学ぶ楽しさを味わう授業を構想したいと考えている。

(1) 感動やあこがれを感じさせる音楽との出会い

昨年度2年生「クラッピング・ファンタジー第1番（6年生を送る会）」の実践から

昨年度の冬、6年生を送る会での2年生の出し物として学年全体で合奏することに決め、「クラッピング・ファンタジー集（長谷部匡俊作曲）」から「第1番」を選曲した。クラップ（手拍子）4パートと鍵盤ハーモニカ2パート、そしてピアノ伴奏という編成の、パート数の多い曲だ。

音楽室の四隅に拡大譜を設置してパートごとに集まる練習形態や、練習方法を自分たちで考えて工夫させるなどの手だてを取ることで、クラップパートでは、子どもがミニ先生となって教え役で活躍したり、リズムを取ることが苦手な子どもをミニ先生が挟んで練習したりするなど、子ども同士で工夫して教え合い・助け合いをしながら協力して練習を進める姿が見られた。また鍵盤ハーモニカパートでも、まとまった響きで旋律を演奏するために、息のコントロールに気をつけて音色をそろえたり、アーティキュレーション（スタッカートやスラーなど）やブレスの位置を決めてフレージングをそろえたりして、お互いに聴き合って練習を進める姿が見られた。当初は「みんなの気持ちと音が一つになって、一体感を感じて演奏する楽しさ」を学ぶ楽しさと考えて取り組み始めたが、活動が進むにつれて、自分たちで合奏をもっと良いものにしたいという意欲が膨らみ、このような「自分たちで練習方法を工夫して練習する楽しさ」がこの題材の学ぶ楽しさの中心へと変化していった。

全体合奏が始まってからは、クラップパートと鍵盤ハーモニカパートが互いに練習を聴き合っ、感想やアドバイスの交流を行った。拡大譜を指さしながら楽譜に根拠をもって考えを述べたり、演奏がばらばらになる感じをなくすには「指揮者が必要」という考えを伝えたりなど、子どもは気付きを伝え合うことで、演奏をよりよいものにしていった。

自分たちで考えて音楽をつくっているという実感とともに、演奏中の表情はさらに明るく、また「ノリ（拍節感）」に一体感が感じられるようになっていった。楽しさいっぱいの本番での発表となり、「クラッピング・ファンタジー第1番」は子どもの大好きな1曲となった。

3年生「リコーダーとなかよしになろう」の実践から

題材でめざす 学ぶ楽しさ

新しく出会う楽器であるリコーダーに 親しみながら奏法を習得し 友達と旋律やリズムの音を合わせて 音色の統一感やパートが重なった合奏の一体感を 味わう楽しさ

この題材では「リコーダーに親しみながら、その音色を感じ取ったり、基本的な奏法を身に付けたりして、リコーダーの演奏を楽しむことができるようにする」のがねらいである。鍵盤ハーモニカよりも息とタンギングのコントロールが、より必要になるリコーダーは、初めは音を安定して出すことが難しい。ましてや運指が加わると尚のことである。

取り組みは、「シ」1音で同じフレーズをくり返す「ポエム（上柴はじめ作・編曲）」から始めた。ホールの開け閉めがないので、子どもはタンギングと息のコントロールだけに集中して、美しい曲想を感じながら、転調を重ねるピアノ伴奏にのって気持ちよく演奏した。子どもからは「きれい。」「吹いていて気持ちいい。」「伴奏が変わる！」などの感想があった。

次にスケール（音階練習）に取りかかった。ホールの開け閉めが始まると、まずホールを指の腹できちんとふさぐことが、難しい。そしてふさげても、次はタンギングとのタイミングがぴったり合わせられない。ここが合わないと、リコーダーは音をクリアに出すことができない。気持ちよく演奏できていたはずのリコーダーが、音を変えようとすると急にうまくいなくなる。子どもにとっての状況は一変し、表情が曇り「なぜか音が出なくなりましたよ。」「だめだあ、うまくできない・・・。」などの発言が聞かれ始めた。

そこで、次に取りかかる曲を「クラッピング・ファンタジー」との再会に決めた。「第2番」だ。「第2番」もオリジナルは鍵盤ハーモニカを使うのだが、易しい音域、易しいリズムと、三つというフレーズの少なさが、子どものリコーダー奏法の発達段階にぴったり合った。使用する楽器をリコーダーに変更して「第2番はリコーダーの2パートがメインです。」と子どもに伝えた。「クラッピング・ファンタジー」と聞いただけで「わあっ！」と歓声が上がり、

子どものモチベーションは一気に上昇した。ポジティブな、楽しかった経験がよみ返り、「ちょっと難しいけど、がんばって練習して吹けるようになりたい！」と発言する姿や、何とか音を出してフレーズを演奏しようと練習する姿が多く見られるようになった。また、どうやって曲をつくっていくかは「第1番」で経験済みなので、練習の見通しがもてたことも、「できるようにになりたい」という意欲や、「ちゃんと仕上げられる」という子どもの自信と安心感につながったと考える。

複式学級「リコーダーとなかよしになろう」の実践から

3・4年生の複式学級では、先輩・後輩のペアがあり、4年生が日常的に3年生のサポートを行っている。4年生には、3年生にソプラノリコーダーのお手本を見せてもらいながらアルトリコーダーを導入した。先輩として3年生への働きかけをしながら、自分たちは一歩先を進むという構図が4年生の心をつかみ、新技能習得への意欲が高まった。4年生には音楽室だけではなく教室でも「アルトリコーダーの練習がとっても楽しみ!」「早くもっと吹けるようになりたいなあ。」など発言する姿が見られた。3年生は、きれいにソプラノリコーダーから音を出す4年生にあこがれ、同じように真似をして吹いてみようとする姿が見られた。そしてアルトリコーダーを練習する様子には、あこがれの眼差しを向ける姿も見られた。

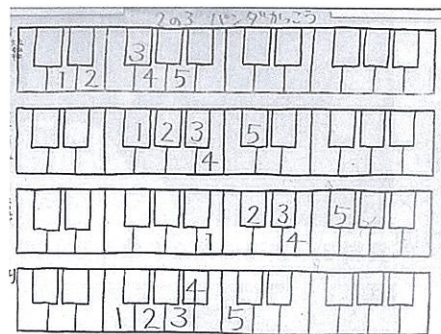
曲は最初の「ポエム」のあと「By the Brook(Brian Bonsor 作曲 FIVE CONCERT PIECES より)」に取り組んだ。「ドレミ」の3音のみで旋律がつけられているが、ピアノ伴奏のコード進行が美しく、エレガントな曲だ。子どもからは「先生、早くあのきれいな曲が吹きたい!」という発言が何度も聞かれた。3音しか使わないが、歌心を刺激される曲なので、フレージングの学習も導入した。「この旋律が文章だとしたら、点と丸はどこに付くかな?」また「どこでブレスをするといいかな?」と問いかけて、みんなでフレージングをそろえて演奏を行った。3年生は最低音とサミングをする両方の「ドレミ」で演奏した。この時期の3年生にとって技術的に難易度が高い取り組みだが、先輩にアドバイスをもらい、また先輩と一緒に演奏したいというこだわりから、熱心に取り組む姿があった。

(2) 互いの思いを伝え合い 表現の交流をさせる

2年生「はくのまとまりをかんじとろう」の鍵盤ハーモニカの実践から

2年生では鍵盤ハーモニカで「かっこう (小林純一日本語詩・ドイツ民謡)」を演奏した。この題材では2拍子や3拍子の学習の他に、発展的な取り組みとして12種類の長調で「かっこう」を演奏して、黒鍵やいろんな調性に親しみ、調性感の違いを実感する活動を導入した。調ごとに使用する鍵盤を見つけてみんなに知らせ、独奏を披露する楽しさを味わうために、白鍵と黒鍵を使った「かっこう」をさがす「パンダかっこうを見つけよう!」の活動を行った。最初に、白鍵だけで弾けるハ長調とト長調の「白かっこう」で基本の運指「5・3・ス・5・3・ス・2・1・2・1〜・・・」を確認してから、「パンダかっこう」さがしをスタートした。

右手の1・2・3・4・5の指番号の鍵盤を見つけて、提示した拡大鍵盤図に番号を書き込んだ(資料1)。「ドレミファソにきこえるかな?」とみんなで長調の音階を確認し、OKならば、見つけた「パンダかっこう」を独奏で披露させた。そして、その後全員で試し弾きをしてみるとい



資料1 見つけた「パンダかっこう」

う形態を取った。「なんか、さっきと感じがちがう〜!」「なんかふしぎ〜。」「こんなの、見つけられるって、すごい!」という感想を口にする姿がたくさん見られた。嬰へ長調などの黒鍵をたくさん使用する調では、「パンダっていうよりペンギンだね。」「ペンギンというよりカラスだね。」「全部黒鍵盤じゃないからカラスとは言えないね。」と感想を話す姿もあった。

大半の調が見つかり、ふりかえりでは「鍵盤の、いろんな場所に、いろんなパンダがいたよ。」「同じ指遣いで、こんなにたくさんの違うパンダが弾けるって驚いた!」「黒鍵盤だけでは『かっこう』を弾けなかったよ。」「何かひみつがありそう。」「もっと、自分で見つけたいなあ。」などの感想があった。「パンダかっこうを見つけよう」の手だてでは、自信をもって独奏を披露したり、誰かが見つけた「パンダかっこう」をみんなで弾いて感想を交流したり、

全音・半音の鍵盤の並び方や調性のちがいによる感じ方のちがいなど、音楽の仕組みへの興味付けとなる効果があったと考える。

3年生「リコーダーとなかよしになろう」の実践から

奏者がどんなふうに演奏したのか、友達の演奏をきいて自分の考えをもつためには、演奏された内容についてよく知っていることが望ましい。例えば、自分もそれを練習したことがあるという状況だ。合奏曲「クラッピング・ファンタジー第2番」に取り組む際「みんなで考えを出し合いながら、自分たちで合奏をよりよいものにして演奏する、学ぶ楽しさ」を味わうために、全体を三つのグループ（リコーダー1st・呼びかけ）、（リコーダー2nd・山びこ）、（クラップのカスタネット1st～4th）に分けて役割を順番に回した。お互いのパートを、練習したことのある経験者として演奏をきき合い、他人事ではないアドバイスを伝え合った。そしてさらに練習方法を考えた。（資料2）。

教師：1回目の全体合奏をしてみましたね。感想や気付いたこと、アドバイスなどはありますか？

A児：「呼びかけ」が遅れていたよ。準備ができてないんじゃないかな？

B児：A児さんに付け足して「呼びかけ」の音が小さくて、「山びこ」としては、困った。だって、「山びこ」が「呼びかけ」より大きな声ってあり得ないし。

C児：今どこかわからなくなって自信がなくなって音が小さくなるから、ちゃんとピアノを聴いて、今どこか数えるといいよ。

D児：クラップとリコーダーの音量のバランスが良くなかった。リコーダーが小さかった。

E児：Codaのリコーダーの息が強すぎるから、少し弱くしたらいいと思う。

F児：D.S.のあとの2回目のCにリコーダーが入るのが遅れたよ。

G児：リコーダーの旋律の「低いレ」の音を、もっとしっかり吹いてほしい。きこえない。

H児：クラップは、音量の変化がもっとあるといいと思う。

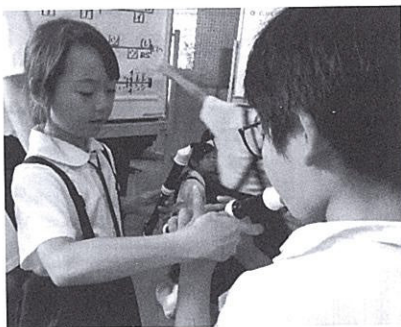
教師：たくさん出たね。さて、どうやって練習するといいかな？

I児：まずは個人練習がしたい。

H児：パートごとにグループ練習も必要だと思う。

J児：ピアノ伴奏もつけて練習したい。きいてもらってやりたい。

資料2 1回目の全体合奏後の子どもの感想や気付いたこと、アドバイスの発言内容



資料3 友達に運指を教えるI児



資料4 友達にリズムをアドバイスするN児

初めての合奏だったが、演奏についての自分の考えをもてた子どもが多数あった。リコーダーパートへは、具体的なアドバイスが出されたので、それぞれに必要な練習を交流して行う姿があった（資料3、4）。また、クラップパートがピアノと合わせて練習するとき、リコーダーパートの子どもは自分のクラップの楽譜を取り出して、一緒に口でリズムを取ったり、エアクラップで一緒に練習したりする姿も見られた。

パートを固定せずに、すべてのパートを全員が体験するという手だては、自信をもって自分の考えをもち、他人事としてではなく、共感をもって伝えようとする活動に有効だと考える。交流をしながら練習を進められたが、話し合いの段階での交流をいかに深めていくかが、今後の課題である。

(3) 成長が自覚できる場を設け 変容を認識させる

3年生「リコーダーとなかよしになろう」の実践から

緊張感をもって合奏の醍醐味を味わうには、観て聴いてくれる観客が必要だ。そこで、2年生を観客として招き、学年合同合奏の発表会を行うことにした。本番前に全体練習を行い、どんなふうに発表を行うか意見を出し合った。観客が設定されたことで話し合いから緊張感をもって行われた。三つのパートをどんなふうに割り振るか、3セットとも合奏を試みて子どもの考えを聴いたが、子どもはみんな自分の位置

からきこえることや、そのときの役割をもとにものを言うので、考えが集約されず、多様になった。そこで、3セット全部を聴いてもらおうということにして、本番を迎えた。発表する子どもは笑顔がいっぱい、演奏の楽しさや、観て聴いてもらえるうれしさを感じ取っていた(資料5)。また、2年生から「えんそうが、ぴったり合っていてすごい!」「3年生のようにになりたいなあ。」などの感想をもらって、満足げな表情を見せていた。



資料5 観客の2年生に演奏を披露する姿

「クラッピング・ファンタジー第2番」の本番を終えて、この取り組みで自分が得たことに気付かせ、自分の成長を自分の言葉で表現させるために「今回の取り組みでゲットしたことと、その理由」をテーマにふりかえりを書かせた(資料6)。

- ☆聞いて、前のと、なにがちがうかをわかるようになりました。**理由**リコーダーをふきながら、よおく音を聞いていたからです。(K児)
- ☆リコーダーをトウで吹けたこと**理由**音楽の時間に、そうなりたいたいと思いながら練習したから。(L児)
- ☆いきをコントロールできるようになりました。**理由**強弱がしっかりできるようになったから。(M児)
- ☆第2番は第1番より練習時間が短かった**理由**つまり、成長したなということ。(N児)
- ☆なめらかな合奏**理由**みんなのきょうりょくがあって、そして2年生のはくしゅが私たちのがんばりになりました。(O児)
- ☆きょう力する力をゲットしました。**理由**あまり遊んだことのない友だちと練習したからです。(P児)
- ☆たすけあい**理由**できない人をできる人が教えてあげたりして、自分だけでなく友だちのことも考えてたすけあいできた。(Q児)
- ☆楽しさ**理由**一人一人が本番でしっぴいをしていても、えがおでい(ら)れたから、自分だけじゃなく、みんな楽しさをゲットできたと思います。(R児)
- ☆集中してがんばること**理由**合そうをいっぱい練習しているうちに楽しくなって、しぜんに集中してがんばることができるようになったと思います。(S児)

資料6 本番後の、取り組み全体のふりかえりより

K児は、よくきくことができるようになり、またそれによって何が変化したか判断できるようになったと書いている。L, M, N児は演奏技能の習得を、またO, P, Q児は、友達との関わり合いの中で、協力することで得たことを書いている。R, S児は音楽の楽しさや、また集中が楽しさにつながることを書いている。これらのふりかえりから、しっかりと成長を自覚し、自分の変容を自己認識している姿が読み取れる。

今回の取り組みで成長できたことの原因でとても多かったのは、「困ったときに〇〇合いをして、助けたり助けられたりできたから」というものと、「できるようになりたいという気持ちがとても強かったから」というものだった。「困ったときに〇〇合いをして、助けたり助けられたりできたから」が子どもによって行動に移されるために、子ども同士がきき合ったり教え合ったりする協働的場面を多く設定してきた。また、「できるようになりたいという気持ちがとても強かったから」と子どもが感じたのは、楽曲に対するあこがれと、これまでのポジティブな経験から、必ずできるという確信のような思いと学習の流れの見通しを常にもち、問いやこだわりをもち続けていたからだと省察する。本番を設定するという手だてを含めた一連の取り組みでは、子どもは学ぶ楽しさを感じ、得ることができたと考える。

今後に向けて

以上の三つの手だてから、音楽科において、子どもが演奏することそのもののみならず、考えをもち、活動に生かして、学ぶ楽しさを感じられる授業を行ってきた。今後は、話し合いの場面での交流を深め、取り組み全体の流れをつくっていく段階から、子どもが自ら見通しをもって考えて決めるなど、子どもが主体となって授業をつくっていく場面をもっと増やしていきたい。そのための手だてを吟味し、学ぶ楽しさを味わえる音楽の授業を実践していきたいと考える。

っぱいに活動していた。子どもが夢中になる楽しい音楽遊びや体を動かす活動を取り入れることで、自然にリズムや拍を体で感じ、学ぶ楽しさを味わっていた。

(2) 互いの思いを伝え合い表現の交流をさせる

本題材の1次では、四分音符や四分休符、八分音符を組み合わせた基本的なリズムパターンを学習した。2次中1時では、JJ|JJ|JJ|JJ|のリズムに合う言葉（バナナ さくらんぼ）を唱えるリズム遊びをした。リズムのまとまりを感じられるよう、同じリズムをくり返す「反復」や違う言葉の組み合わせ「問いと答え」の音楽を形づくっている要素と結び付けながら、リズムにあてはまる言葉（3文字 5文字）を選び、リレーのようにつなげいく活動をした。

リズムに合う言葉を食べ物に限定したこと、様々な食べ物の絵カードを提示したことで、子どもは絵カードを手がかりに様々な食べ物を思い浮かべ、手拍子でリズム打ちをしていた（資料3）。

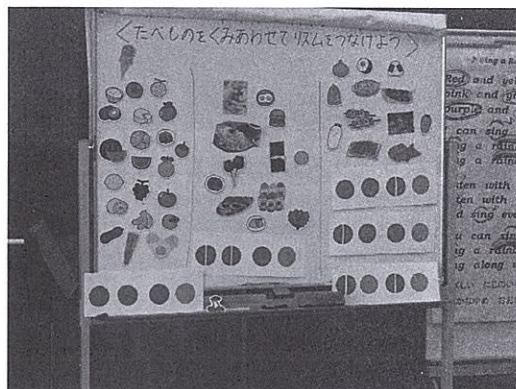
同じリズムをくり返す「反復」で、リズムと果物の色を結び付けて組み合わせを考えたB児の工夫に気付いたD児（資料4-1）。

E児の発表を聞いたF児の、材料と料理の関係性に気付く発言から、いろいろな材料と料理の組み合わせを考えていたG児とH児とI児（資料4-2）。

「バナナ チョコレート」などリズムも味もぴったりの組み合わせや、かき氷とかき氷の味や大人の好きなものなど、子どもなりに二つの食べ物の関係性を考えたり、友達の考えた面白い組み合わせを聞いたりしながら、言葉によるリズム遊びを楽しんでいた（資料4-3）。

2次中2時では4文字の言葉「のりまき」のリズムをつくり拍の流れにのって自分でリズムを打ったり、友達のリズムと自分のリズムをつなげたりする楽しさをめざした。

JJJ| 「バナナ」JJJJ| 「さくらんぼ」のリズムに慣れていた子どもたちには「のりまき」の4文字の言葉に「あれっ？」と戸惑う姿が見られた。既習のJJJJ| 「バナナ」JJJJ| 「さくらんぼ」のリズムにあてはまらない「のりまき」を、4拍目が四分休符で終わるリズムを表そうとしていた。指をおってリズムを考えるが、既習のリズムにあてはまらず考え込むL児。JJJJ| 「のりまき」と表したいけれどなかなかあてはまらず、よく考えて悩むM児。JJJJ| のリズムにあてはめられず、4文字のどこが難しいか考えているN児。上手にJJJJ| のりまきと表すO児。難しいところやうまくいかないところはどこなのか話し合っ、あてはまるリズムが見つけれられるように、ペアになって考えるよう声かけをした。



資料3 交流の支援となった絵カード

(リズムを手で打ちながら)

B児：「いちご りんご」
「レモン バナナ」

C児：「同じリズムや！」

D児：「リズムも同じで色も同じだよ。」

子ども：「ほんとだ！」

(資4-1)

E児：「たまご オムライス」

F児：「前の食べ物が材料になってる！」

G児：「りんご りんごあめ」

H児：「まだあるよ。
あんこ さくらもち」

I児：「まぐろ まぐろどん」もや！

(資4-2)

J児：「バナナ チョコレート」

K児：「いちご パンケーキ」

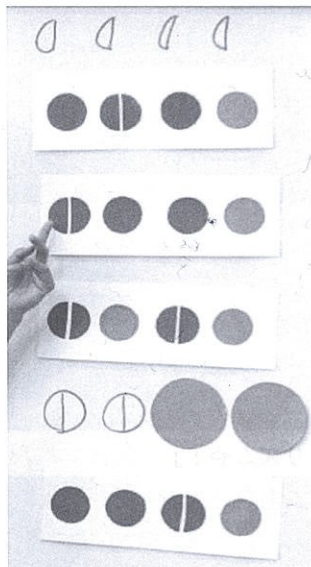
子ども：「おいしそう！」
「リズムも味もぴったり合う！」

(資4-3)

資料4 友達の組み合わせを聞いて新しい組み合わせに気付く



資料5 リズムを発表するN児



資料6 絵譜の提示



資料7 手拍子をしながらグループで話し合う姿

二人で偶然見つけたリズムに笑顔になったO児とP児。手拍子を打ちながら相談し、3つのリズムをみつけたQ児とR児。「このリズム合ってる？」とリズムを打って確かめ合っているS児とT児など、リズムづくりに自信のない子どももペアで考えを交流することでリズムづくりを楽しむことができていた。N児は八分音符にあてはめるだけで♪♪♪♪♪♪♪♪から進めずに戸惑っていたがペアで話し合うことで八分音符をつなぐことを思いついて、♪♪♪♪♪♪♪♪のリズムを考え出し発表することができた(資料5)。

さらに子どもが、楽しくリズムづくりを考えるための手だてになったのが、絵譜の提示である(資料6)。

♪は○、♪はD、♪は●で表す。子どもが考えて発表したリズムを絵譜にして提示していく。友達のリズムの絵譜を見ることで、子どもは「わあ!」「おもしろい!」と笑顔になり、友達のリズムを手拍子で打ったり、○とDと●を入れ替え、組み合わせを変えて新たにリズムを考えようとしたりする姿も見られた。きいて頭の中で考えるだけでは難しいリズムも、絵譜を提示することで視覚的にわかりやすくとらえることができ、楽しくリズムづくりをする手がかりになった。また、互いのリズムを交流するためにも有効な手だてとなった。友達と思いついたリズムを交流し、絵譜を提示したことで、6種類のリズムを出し合うことができた。

題材のまとめとして、2次中の3時ではグループで食べ物リズムをつなげる活動を取り入れた。「おかしシリーズ」「つめたいものシリーズ」「からいものシリーズ」などのテーマをグループで決め、食べ物を選び、リレーのようにつなげていくために話し合いをした。「バナナ」(3文字)「のりまき」(4文字)「さくらんぼ」(5文字)リズムが打てるようになった子どもは、友達と話し合いながらシリーズに合った食べ物を選び、リズムをつなげていた(資料7)。3班は、のみものシリーズで「ソーダ たんさん コーラ カルピス コーヒー カフェオレ スープ コーンスープ」2班は、おかしシリーズで「しらたま ケーキ いちご キャンディ プリン さくらんぼ アイス チョコレート マシュマロ ぶどう」などシリーズに合った言葉を出し、つながりや言葉のリズムを話し合っていた。自分の思い付かなかった食べ物、リズムが出てきたというふりかえりもあり、考えを交流することは楽しく表現することにつながっていった(資料8)。

- ・のみものしりいずにして、なかなかのみものがおもいつかなかったけど、みんながおしえてくれて、かんがえたらじぶんもおもいつきました。
- ・はんのみんなでかんがえると、わたしがきづかなかったリズムもあってたのしかったです。
- ・ほかのはんがリズムをれんしゅうしてるときから くふうしているというのがわかりました。みんなでじゅんばんをかんがえたり、どうしたらみんながたのしんでくれるかをかんがえました。そしてつくれました。

資料8 グループで話し合った後のふりかえり

(3) 成長が自覚できる場を設け変容を認識させる

題材の最後の時間となる2次中4時に、〈たべものリズムをつなげよう〉とグループで考えた「のみものシリーズ」「おかしシリーズ」の発表の場を設定した。子どもはバナナ（3文字）リズム♪♪♪|や、さくらんぼ（5文字）リズム♪♪♪♪♪|のりまき（4文字）のリズムを自由に打てるようになっていた。グループで話し合った○○シリーズ、シリーズに合った食べ物、食べ物の組み合わせ、順番を書き込むワークシートは、子どもの考えを書くだけでなく、子どもが自信をもって発表するための手だてにもなった（資料9）。

どのグループの子どももワークシートを見ながら、前に出て上手に発表することができた。発表の場を設定することで、自分たちが思い付いたシリーズの食べ物をさがす楽しさ、自分たちなりにつながりを工夫する楽しさ、さまざまな食べ物をリズムにして表すことができる楽しさ、自分たちが思い付かなかった友達のリレーを聞く楽しさを味わうことができた。自分が工夫して考えたことを友達に認められた楽しさを感じている子どももいた（資料10）。

資料9は「たべものリズムをつなげよう」というワークシートの写真です。1. たべもの組み合わせでリズムをつなげようという部分には、① すいご ⇒ ききおり、② けえき ⇒ ばんけえき、③ あんこ ⇒ さくらもち の組み合わせが示されています。2. 自分たちでリズムをつなげようという部分には、ケーキ、ハンバーグ、ハチマキ、なまこ、すいご、ききおり、ばんけえき、さくらもち、けんちん汁、おかし、いりす などの食べ物やリズムの組み合わせが記入されています。

資料9 発表の支援になったワークシート

資料10は発表後のふりかえりとして書かれた手書きの感想文です。内容は「わたしはバナナですけど、さんとか、さんとか、これかいていて、いいいうって、たからわたしもこれはどうというって、それいいねっていわれたからよかった、けいぶんかんがえてるんたつていうのか、わかりました。」と述べています。

資料10 発表後のふりかえり

今後に向けて

子どもが「学ぶ楽しさを味わう」授業をめざして実践に取り組んできた。その中で課題として残ったのは子どもの見取りである。

のりまき（4文字）リズムづくりでは四分音符・八分音符、四分休符を組み合わせ、試行錯誤しながら表現を工夫する姿が見られた。しかし言葉のもつ自然なリズムと音符、休符を組み合わせたリズムが合わないと感じる子どももいた。授業では教師がその子どもの違和感を見取ることができず、その思いを取り上げることができなかつたため、音符や休符の組み合わせの活動になった一面もある。教師が活動に戸惑っている子どもや疑問を感じている子どもを見取ることが、さらに学びを深めることにつながると感じた。

試行錯誤して考えた自分の表現を友達と互いに聞き合うことは、子どもの「もっと～な表現にしたい」という「こだわり」につながっていく。子どもの思いや意図に合った表現に高めていくためには、聞き合う前と後で、友達の表現のよかったところや自分の表現との違いを、子ども自身が言葉や音、音楽で表したり実感できたりすることが大切である。教師は、子どもが聞き合いによってどのように表現が変化したのかを見取り、次の学びへと生かしていくことが必要だと考える。

教師がどこまで子どもの「問い」や「こだわり」を追求させるのか、題材における子どものゴールのイメージを授業の前に教師自身も持っていることも必要である。